

政治的シンボルとしての「特攻」——『多賀城海軍 工廠勤労働員の記録』にみる女学生の戦争の表象——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片瀬, 一男 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000228

政治的シンボルとしての「特攻」

—『多賀城海軍工廠勤労働員の記録』にみる女学生の戦争の表象—

片 瀬 一 男¹

概要：本稿の目的は、宮城学院資料室が公開した戦時下の学徒勤労働員記録『多賀城海軍工廠勤労働員の記録－動員生徒感想文集』のテキスト・マイニングによって、女学生における「特攻」の表象を検討することにある。また、当時の軍事史料および新聞報道も検討することで、アジア・太平洋戦争末期における「特攻」が、国内向けのプロパガンダにおいてシンボリックな意味を有した可能性が高いことを示す。これによって、「特攻」は、アメリカ海軍に損害を与えて西太平洋の制空権を回復するという戦術的意味をもったというより、日中戦開戦以来の戦争協力で疲弊した国民を慰撫し、講和に向けての国内的条件を整えるという世論対策の意味をもったことを明らかにした。さらに、宮城学院の動員記録のテキストマイニングをもとに、日本の「近代家族」あるいは「家族国家観」における性別役割は、戦時下では前線の兵士（特攻隊員）と銃後の守り（勤労働員の女学生）という分業へと再編成されたものの、この性別役割体制は、戦後の高度経済成長を通じて「男性稼ぎ手モデル」によって、現在まで維持されていることを示唆した。

キーワード：特攻、「一撃講和論」、政治的シンボル、性別役割分業

“Tokkou” as a Political Symbol : Girls’ Representation of War

Kazuo KATASE

Abstract : The aim of this paper is to consider girls’ representation of “Tokkou” through reports of forced work experiences in wartime and indicate possibility that it had symbolic meaning, that was not to get air superiority of western pacifics but to prepare public-opinion for “Ichi-geki-kowa” : reconciliation after one attack.

Keywords : “Tokkou”, “Ichi-gaki-kowa”, Political symbol, sexual division of labor in war time

¹ 東北学院大学情報科学部データサイエンス学科

「神風攻撃隊の発表は全軍の士気昂揚並に国民戦意の振作に至大の関係ある処・・・」

1944年10月26日 海軍軍令部² 発

大西瀧治郎・第一航空艦隊司令長官宛電文の一部、傍点引用者。

防衛庁防衛研究所戦史室, 1972, 『戦史叢書 海軍捷号作戦 フィリピン沖海戦』

(https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/SoshoView?kanno=056).

「広範な国民化は・・・一定の目標をめざした、容赦のない、狂信的なまでに偏った態度によって成し遂げられるのだ。」傍点引用者

Hitler, Adolf, 1925, *Mein Kampf*. Franz Eher Nachfolger GmbH16.

(= 2016, 平野一郎・将積茂訳『わが闘争(上)』KADOKAWA (Kindle 版))

「[新しい政治][ファシズム]は、一般意思に具体的表現を与える神話やシンボル、儀礼や祝祭によって、民衆を自発的に国民的な神秘的雰囲気浸らせようとした。」

[] 内、引用者補足、傍点引用者

Mosse, George, L., 1976, *The Nationalization of the Masses*. University of Wisconsin Press.

(= 1994, 佐藤卓巳・佐藤八寿子訳『大衆の国民化－ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』柏書房)。

はじめに

本稿の目的は、宮城学院資料室が釈文を作成し、公開した戦時下の学徒勤労動員記録『多賀城海軍工廠勤労動員の記録－動員生徒感想文集』（宮城学院資料室, 2001, 2004, 以下「感想文集」と略記）のテキスト・マイニングによって、女学生の目に映ったいわゆる「特攻」

² 海軍軍令部とは、旧・大日本帝国海軍の機関であり、海軍省が内閣に従属し、軍政・人事・予算・決算を担当するのに対して、全軍の統帥権をもつ天皇に直属し、その統帥を輔翼する立場から、海軍全体の作戦・指揮を統括した機関である。なお、戦時は（たとえば真珠湾奇襲作戦の時）、連合艦隊司令長官が海軍の作戦立案や指揮を執ったが、最終的な作戦目標は軍令部が立案していた、とされる。海軍軍令部長は、天皇によって海軍大将または中将から任命された勅任官であり、次長とともに御前会議の構成員でもある（アジア歴史資料センター「日米交渉」の項 (<https://www.jacar.go.jp/nichi-bei/reference/index17.html>)）。

の表象を検討することにある。また、それと合わせて当時の軍事史料および新聞報道も検討することで、アジア・太平洋戦争末期における「特攻」が、対米戦における戦術的な意味ではなく、国内向けのプロパガンダにおいてシンボリックな意味を有した可能性が高いことを示す。すなわち、「特攻」は、アメリカ海軍に大きな損害を与えて西太平洋の制空権を回復するという戦術的意味をもったというより、日中戦開戦以来の戦争協力で疲弊した国民を慰撫し、講和に向けての国内的条件を整えるという世論対策的意味をもったことを明らかにする³。

これまで、日本軍による世論操作としては、1937（昭和12）年の国民精神総動員運動とのかかわりで、日中戦争に至る満州事変・上海事件の報道が取り上げられてきた（有山、2001）。そこでは日本陸軍の大陸進出を正当化するために、大衆のメディア（新聞・ラジオ）が動員されたことが指摘されている。いわゆる「大本営発表」の虚偽性に関する指摘もある（保坂、2019）。しかし、この世論操作はアジア・太平洋戦争末期にも続けられた。とくにフィリピンのレイテ沖海戦以降、小磯国昭内閣も軍部も講和はやむなしという立場に傾きつつあったが、沖縄戦を控えて兵士だけでなく、前線に送る兵器等を生産する「銃後の守り」にある国民各層（たとえば学徒勤労動員された生徒）の「国民戦意の振作」を図らねばならなかった。この意図は、冒頭に引いた軍令部の電文すなわち第一航空艦隊司令長官の大西瀧治郎中将に特攻隊の編成を指示した電文にも表れている。特攻隊は蒙古襲来時の「神風」にも擬せられ、皇国・日本の不敗神話を国民に根付かせる「シンボル」として利用された。こうして、かつてヒットラーが『わが闘争』に記したように「広範な国民化は・・・一定の目標をめざした、容赦のない、狂信的なまでに偏った態度によって成し遂げられる」ことになる。

歴史学者のG. モッセは「ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化」という副題をもつ『大衆の国民化』（Mosse, 1976=1994: 13-30）のなかで、ヒットラーがワイマール憲法のもとで「民主的に」政権を奪取した政治手法をシンボルにもとづく「新しい政治」と呼んだ。それは、18-19世紀にその萌芽があった「シンボル政治」を継承しながら、20世紀に大衆に浸透したラジオ、新聞といったメディアを利用して、広範な国民各層の支持を合法的に調達するという政治手法であった。彼によれば、ファシズムはしばしば恐怖政治と誤解されるが、シンボルの操作によって国家体制への国民の自発的参加を促すものであった。この点で、議会制民主主義は民衆をアトム化し、群衆とするが、ファシズムは一種の世俗的宗教として「大衆の国民化⁴」を推し進め、「想像の共同体」（Said, 1978=1993）へと統合するものであった。

³ いわゆる「特攻」には、このほか人間魚雷「回天」による水中特攻、小型艇「震洋」による水上特攻もあった（一ノ瀬、2020）。

⁴ ここでいう「国民化」とは、第一次世界大戦後、民主的なワイマール憲法下で花開いた大衆的・享樂的文化に浸ったドイツ国民を再び対外戦争に向けて再組織化することを意味する。「大衆の国民化」

日本でも昭和前期は「大衆の国民化」が進行した時期であった（有山，2001）。それは国民の「大衆化」と、それによって生じた大衆を再び「国民化」し、国家総動員体制に「自発的」「主体的」に編入していく時期であった。すなわち、明治後半の日露戦の戦勝報道で発行部数を伸ばした新聞と、関東大震災後の防災対策として開局が急がれたラジオが、昭和前期には地域・階層を問わず国民に浸透し、大衆文化が都市部を中心に隆盛した。たとえば、2023年度の下半期のNHK朝の連続テレビ小説「ブギウギ」で活写されているように、笠置シズ子らが服部良一作曲のジャズ歌謡で一世を風靡した「松竹歌劇団」は、1941（昭和16）年に解散を命じられるまで人気を博していたことはよく知られている⁵。

こうした大衆文化を担った新聞やラジオといったメディアは、1938年（昭和13）年の第1次近衛内閣によって施行された「国家総動員法」のもとで、日中戦争からアジア・太平洋戦争末期に至るまで、「国民精神」を戦争に動員するための「シンボル政治」（Mosse, 1975=1995）の強力な武器となった。この「新しい政治」では、過去の神話もシンボル操作によって現代に蘇る「神風特攻」とは蒙古来襲時に蒙古・高麗の軍船に襲いかかって一夜にして大船団を海底へと葬り去った「神風」の神話を蘇らせるシンボルであった。

そこで、次にアジア・太平洋戦争末期のレイテ戦から沖縄戦に至る期間に投入された「特攻」が、この「シンボル政治」のもとで、「銃後の守り」すなわち学徒勤労動員された女学生の目にどのように映り、彼女らの「国民精神」にどんな影響を与えてたのかみていこう。

1. 「一撃講和論」と特攻の位置づけ

アジア太平洋戦争中、アメリカ軍から「カミカゼ」と呼ばれた日本軍の航空特攻は、組織的な戦死前提の特別攻撃を任務とした戦術であり、1944年10月に大西瀧治郎中将（第一航

（Mosse, 1976 = 1994）という用語は、ナチズムが大衆的な民主主義のなかで、メディアを利用した「シンボル政治」によって大衆を操作し、その投票による正当性を確保して国民社会主義体制を確立していった経緯を説明する概念である。従来、nationalism は国家主義と訳されることが多かったが、Mosse (1976 = 1994) の訳者は敢えて「国民主義」と訳している。これについては、訳者の一人・佐藤は Mosse (1976 = 1994) の解説（佐藤, 1994: 137）で次のように述べる。「ナショナリズムを「国民主義」ではなく「国家主義」と訳すことで、大衆民主主義における国民の魔性を棚上げする者は、「第三帝国が降伏してなお、命を賭して戦おうとするドイツ兵がなぜ在りえたか？」というフーコーの問いに答えるべきである。フーコーはそれを力への愛着と説明したが、民主権下の大衆政治・（中略）・における権力とは、国家装置ではなく国民心性に基づくものである。」ナチズムを主導したのは国家権力ではなく、「大衆民主主義における国民の魔性」一たとえそれがフーコーのいう「パンノプティコン」のもとで規律化された国民であったとしても。

⁵ この点で象徴的だったのは、1937（昭和11）年にメディアを騒がせた2つの事件であった。この年の2月に陸軍若手将校による決起事件「二・二六事件」が起こったが、5月にはいわゆる「阿部定事件」がメディアを席巻した。昭和初期が軍国主義と「エログロナンセンス」が併存した時代と言われるゆえんである。なお、この年には現在の国会議事堂も竣工しているし、1929年にはプロレタリア美術家同盟が設立され（ただし1934年に解散）されていたので、軍国主義と「エログロナンセンス」と議会民主主義と社会主義の時代とも言ってもよいのかもしれない。

空艦隊司令長官)⁶の命令によってレイテ沖海戦のために編成された「神風特別攻撃隊」を嚆矢とする。それ以前にも「特別攻撃」と呼ばれたものはあったが、それらは生還の可能性を一応、準備しての攻撃であったのに対し、「神風特攻」は文字通り「体当たり攻撃（自爆）」による「決死の攻撃」であった（森岡、1995）。

ミッドウェイ海戦による空母や戦闘機および搭乗員の喪失以降、日本の海軍航空隊は西太平洋での制空権をアメリカに奪われて劣勢に回ったが、とくに1944年6月のマリアナ沖海戦での敗北、7月のサイパンの陥落以降は、通常航空戦力ではもはやアメリカ軍に対抗困難という判断が各部署でなされ、「新型兵器」による局面打開への動きが活発化してきた、という（防衛庁防衛研修所戦史室、1971）。その背景には、当時の小磯国昭内閣や軍首脳（陸軍大将・東久邇宮稔彦王など）が提唱した「一撃講和論」があったという（一ノ瀬、2020）。それは戦局が悪化し「講和」を余儀なくされた局面で、できるだけ有利な条件で講和に持ち込むためにはアメリカ機動部隊に航空機による一撃を加えるとともに、それによって同時に日中戦争の開戦以来、長く戦争協力に堪えてきた国民の怒りを鎮めて講和に持ち込む方法でもあった。ここから一ノ瀬（2020：32）は、「一撃講和論」には2つの特徴があったと推測する。すなわち、「長いあいだ戦争に協力してきた国民の怒りを引き起こさないための選択であったこと、そして戦いの決め手が陸海軍の航空戦力であったこと」（一ノ瀬、2020：36）である。このことから特攻には国民の「怒りを引き起こさない」という国民世論対策の側面があったとみることがでる。

2. 「特攻」と「学徒勤労動員」

しかし、特攻の実行はたんに講和に当たって国民の「怒りを引き起こさない」という消極的な国民世論対策にとどまらず、もっと積極的な意味ももったと考えられる。それは、先にもみたように、海軍軍令部が特攻攻撃隊の編成を大西第一航空部隊司令長官に指令した電文（起案は軍令部の源田実参謀とされる）中の「国民の戦意の振作」という言葉に表れている

⁶ アジア太平洋戦争当時、日本軍には空軍がない代わりに陸軍と海軍がそれぞれ戦闘機（たとえば「隼」は陸軍、「零戦」・「紫電改」は海軍）・輸送機など航空機の部隊をもち、それを統括する部署をもった。この統括部署は陸軍は陸軍航空部、海軍は海軍航空本部である。第一次世界大戦後の軍縮が保有する艦艇制限で行われたために、大正期以降は軍縮で不利な立場に立った日本の帝国海軍は、航空戦力の拡大に力点を置いた。ただし、この時期、海軍は航空分野に関する中央総括部署をもたずに、航空戦力の拡充には、海軍省内部部局や海軍艦政本部が分割して担当していた。しかし、刻々と進歩する航空技術に対応するためには統一的に管轄する担当部署が必要であるとの認識から、1927（昭和2）年に海軍航空本部令（勅令第61号）により海軍艦政本部から分離独立する形で海軍航空本部が創設された。以降、航空行政を経括し、航空戦力増強を推進するための組織として順次強化された。「航空特攻」も海軍航空本部を中心に立案されていった（野村、2020）。

戦意高揚の効果である。それは前線の兵士だけでなく「銃後の守り」にも及んだ。そもそも特攻は1回の戦闘で航空機1機（また掩護機も危険にさらされる）を消耗するという戦略である。したがって、この消耗を補う航空機の増産が求められるので、軍部は特にサイパン陥落以降、国民に航空機増産への協力を要請した。

こうして海軍航空工廠に大量に労働力を確保する方策の1つが「学徒勤労動員」であった。これは1944年8月の勅令第518の「学徒勤労令」によって行われ、主に中等学校（中学校、高等女学校）の生徒に学外の工場等に「通年動員」を義務づけるものであった。「通年動員」というのは、それまでの「勤労奉仕」が夏休みなど長期休暇だけだったのに対し、授業期間も使って行われるものだった。すなわち、通常の授業を停止して学校教育の代わりに出欠をとって行う動員で、出席日数が足りないと卒業できないという点で強制力を伴った。

宮城高女の場合、まず1944（昭和19）年5月に「東北風（扶桑）202工場」（長町の「日本電気株式会社」の戦時名）との間に「学校工場化契約」成立し、「専攻科」生が勤労動員で同工場に赴き、電波探知機部品製造技術を習得することになった。また、同工場で研修を受けた実習生を中心として、校内に「学校工場」（同工場の分工場）を開設した。1944年10月に「学徒勤労令」による「通年動員」が指令される。翌11月3日には4,5年生合計170名が横須賀の海軍航空工廠に向かった（深谷, 2003）⁷。この時、横須賀を中心とした京浜工業地帯には、宮城県からは、宮城高女のほか、宮城第一高女、常盤木高女、尚絅高女などから合計2,000名ほどが動員されている。この横須賀の海軍航空工廠で宮城高女の生徒に割りあてられたのは特攻機「桜花」の製作であった（これについては、末尾の「付論：女学生たちの「桜花」」参照）。

他方、多賀城の海軍工廠では、主に航空機に搭載する砲弾の信管や火薬の製造がおこなわれていた。同工廠には、若柳・登米高女が1944年の11月に入所している。その後、1945年4月に横須賀に動員されていなかった宮城高女4年生が多賀城工廠に入所している。

⁷ この動員は、直近の「学徒動員令」（1944年8月23日の勅令第518号）の第6条「学校報国隊ニ依ル学徒勤労ニ付其ノ出動ヲ求メントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ文部大臣又ハ地方長官ニ之ヲ請求スルハ申請スベシ学校ノ校地、校舎、設備等ヲ利用シテ為ス学校報国隊ニ依ル学徒勤労ニ付亦同ジ」にもとづいて行われた。したがって、「出動要請」の流れは、軍（軍工場長）→文部大臣／地方長官（知事等）→学校長となり、工場の割り当ては県庁（知事）が行った。しかし、「学校報国隊出動申請書」（神谷ほか, 2007: 19）が学校、県庁が戦災で焼失しているので、記載された「事業の種類」「報償金額」など詳細は不明である。この時期、女子の広域動員はしないという申し合わせがあったにもかかわらず、この時期、東北・北海道の高女の生徒のみ京浜地区に大量動員があった。たとえば「神奈川の学徒勤労動員を記録するの会」の記録（1999: 3）によれば、戦争末期、福島県から5,000人、岩手県から3,000人、宮城県から2,000人など東北・北海道だけで2万人近い勤労動員があったのに、東京からは3,000人で、生徒数を考えると少ないと言わざるを得ない。

3. 資料としての「感想文集」

今回分析する「感想文集」は、この時、多賀城の海軍工廠に勤労働員された宮城高等女学校（現・宮城学院女子高校）および登米高等女学校（現・宮城県登米高校）・若柳高等女学校（現・宮城県迫桜高校）⁸の生徒による感想文である。彼女らは、同工廠で浦戸栄一という軍属のもとで火工部と機銃部に分かれ、火薬や信管などの製造にあたっていた。

この間の流れをレイテ沖海戦から「感想文」の成立まで、戦局と合わせ「感想文」の解説（大平，2004）をもとに示すと以下のようなになる。

1944 年 10 月レイテ沖海戦。20 日に神風特別攻撃隊編成。

1944 年 11 月 上記勅令による宮城県への「通年動員」指令。

11 月 22 日 若柳高女・登米高女 3 年生多賀城に到着。

12 月 25 日 塩釜港空襲、若柳・登米高女感想文。

1945 年 3 月 9 日～3 月 10 日 東京大空襲。

4 月 1 日 アメリカ軍が沖縄本島に上陸。

4 月 7 日 戦艦「大和」沖縄へ「海上特攻」のため出港。同日、坊ノ岬沖海戦でアメリカ航空隊の爆撃・水雷攻撃により沈没。

4 月 21 日 宮城高女 4 年生 多賀城工廠に入所。

5 月 7 日 ドイツがポツダム宣言を受諾し無条件降伏。

5 月上旬 宮城高女感想文。

こうしてみると、若柳・登米高女の感想文が書かれた時期と、宮城高女の感想文が書かれた時期の間には5ヶ月ほどのずれがある。このうち、前者が書かれたのは塩釜港空襲のあった夜と言われる。この空襲は B29 爆撃機 1 機によるものとされるが、第 1 被弾地帯は尾島、中新田で、第 2 被弾地帯は東町、内城、舟戸、本町など広範囲にわたる。被弾地帯は、東方から西方に延長約 1 キロメートル、幅員約 30 メートルと推定され、焼失家屋戸数は 483 戸であった（塩竈市，1985：308-310）。

⁸ 高等女学校は 1899（明治 32 年）に公布された「高等女学校令」にもとづき、各都道府県に創設された女子教育を行う旧制中等教育学校のことである。ただし、同年に公布された文部訓令 12 号により学則でキリスト教を正課にすると、各種学校の扱いとなるため、宮城学院は 1943 年まで女学校（各種学校）であった。また登米高女は、1920（大正 9）年に、宮城県登米町立実科高等女学校として設立され、1927（昭和 2）年に宮城県に移管され、宮城県登米高等女学校に改称された。また若柳高女は、1929（昭和 4）年に若柳実科高等女学校として創設され、1933（昭和 8）年に県立移管されて宮城県若柳実科高等女学校となり、1943（昭 18）年に改称し、宮城県若柳高等女学校となった。なお、2001（平成 13）年 4 月に宮城県栗原農業高等学校と統合して宮城県迫桜高等学校が開校している。

姓名	昭和四年六月一日生	性別	女
配属	浦戸組	家族構成	父 軍属 母 専業主婦 姉 1人 妹 1人
学校	宮城高等女学校	住所	仙台市花壇
得意科目	地理・歴史	不得意科目	物理・化学
長所	読書	短所	運動
特技	洋裁	趣味	読書
運動	バレー・卓球	健康状態	良好
感想文	現在健康シテ		

調査票

-9-

図1 記入された調査票
(宮城学院資料室, 2001: 5)

感想文の原本を例示すると図1のようになる。まず生徒たちは調査票に氏名、家族構成、得意・不得意科目、長所・短所などを記入する。ここに例示した調査票からは、この生徒が宮城高女の15歳の少女（昭和4年生まれ）で仙台市内の花壇に父母姉妹の5人家族で暮らしており、父親は軍属であること、本人の得意な科目が「地理・歴史」で、不得意科目が「物理（物理）」であることなどが分かる。さらに、趣味が「読書」で、特技が「洋裁」、運動は「バレー・卓球」となっている。

また裏面の「感想文」（図2a, b）からは、「浦戸組」で信管製作に配置され、作業場を教室と心得て真剣に作業に取り組む決意が述べられている（「通年動員」なので、学校の授業がなく、工場動員が授業の代わりとされていた）。また後段では、作業や工具に慣れ、早く信管を作り、沖縄戦で決死の戦いを繰り広げている「特攻隊の勇士」に報いたいという銃後の守りの決意が述べられている。また、政府が「一撃講和」に向けて動いているにも関わらず「米英撃滅」による「勝利の日」の到来を信じ、それに向けて奮闘するという「軍国少女」の決意が示されている。他の「感想文」の内容は、後ほどテキスト・マイニングを踏まえて



図 2a 「感想文」の記入例
(宮城学院資料室, 2001: 9)

皇国の興敗（廢）を決する此の秋、私達は学徒として、雄勇、此の多賀城海軍工廠へ入廠し、浦戸組へ配置になった。

自分は第五工場の信管工場に入ると感激に感じた事は、我々は学徒である、其の学徒である以上は、此の場所、即ち教室と同一であると直感し、教室内の如く静粛を旨とし、作業に従事しなくてはならぬと固く心に誓った。そして空気が美しい、新鮮な草木の香のたぐよ場所に建てる作業場の明るさ等は、私達をして米英撃滅の為の信管の正品（ママ）を多く造り上げ、特攻隊の勇士に報いる奮撃の心をいやが上にも高めました。又作業場内の工員さんも、皆親切なので、私達は本当に感謝し、幸福に思っています。然しそれに甘んじて居る場合には有りません。一刻も早く作業になれ、工員の方々に一致協力し、足並みを揃へて、勝利の日まで進み行く覚悟を強固にし、日々に上達するのを見て愉快な心で一つばいす。

終り

図 2b 「感想文」の積文
(宮城学院資料室, 2001: 8)

分析するが、概ねその趣旨は同一である。いずれも「皇国日本」の勝利を信じて「銃後の守り」についた「学徒」として、「英米撃滅」のための兵器製造に全力を尽くしたい、といった内容である。これを「組長」で軍属の浦戸に提出するための「付度」であったのかは不明である。ただし、この例示にもあるように工場や他の工員また「組長」に対しては、概ね肯定的な言及が多い。

こうした調査票と「感想文」はこの浦戸組のものしか見つかっていないので、これを書かせたのは組長の浦戸栄一と考えられるが、その動機は不明である（大平, 2004）。これが宮城学院同窓会を経て資料室に寄贈されたいきさつは下記である。

浦戸は戦後もこれらの調査票と「感想文」をトランクに入れて、度重なる転居の際にも持ち歩いた。石巻に転居した時（ここで浦戸は自転車店を営んでいた）、登米高女の卒業生で浦戸組に属した女性と再会し、「感想文」の返却を始めた。浦戸は他の2校についても返却したいと希望したが、それを果たせないまま1991年に他界した。そこで夫人がその遺志を継ぎ、各学校の同窓会に返却したが、その際、コピーをとっていた。宮城学院資料室（担当・

大平聡教授)では、このうち宮城高女分を「感想文第1集」(宮城学院資料室, 2001)として整理し、他の二校についてもコピーなどをもとに「感想文第2集」(宮城学院資料室, 2004)として取りまとめ、「戦時下の宮城学院展」で公開した。

なお、それぞれの学校で「感想文」が収録されているのは、

宮城高女 総数 43 点中、原本 20、コピー 23

若柳高女 総数 23 点中、原本 6、コピー 17

登米高女 総数不明、原本 8、コピー 2

このうち宮城高女と若柳高女は原本・コピー合わせて全て揃っているが、登米高女は浦戸が一部返却しているので、総数も不明である(大平, 2004: 10)⁹。

4. 「感想文」のテキスト・マイニング

4.1. 分析の方法

ここでいうテキスト・マイニングとは、「定型化されていない文章の集まりを自然言語解析の手法を使って単語やフレーズに分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析して有用な情報を抽出する手法やシステムである。マイニング(mining)とは「発掘」という意味で、テキストの山から価値ある情報を掘り出す、といった意味が込められている。・・・(中略)・・・テキスト・マイニングでは膨大に蓄積されたテキストデータを単語やフレーズに分解し、これらの関係を一定のルールに従って分析することにより、単語間の関係や時系列の変化などを抽出する」(IT-用語辞典 e-Words)という方法を意味する。つまり、テキスト型のデータ(文章)をコンピュータに取り込み、そこから形態素(語彙)を抽出してその間の関係を調べ、それをもとにさまざまな統計的手法(たとえば多変量解析の手法であるクラスター分析や対応分析など)を用いて、テキストの構造を探索的に分析する手法を意味する。実際の分析例としては、新興宗教の青年信者の「体験談」をもとにした霊能者への帰依の深化過程の分析(秋葉・川端, 2004)、漱石の『こころ』の「死」をめぐる語彙の分析から「先生」の自死の記述が不自然になされているわけではないことを指摘した研究(樋口, 2003)、衆議院選挙の争点をめぐる三大新聞の社説の比較検討(鈴木, 2008)、宮城学院の同窓会記念誌寄稿者のコーホートごとにその寄稿文の布置関係を対応分析によって明らかにし、同校の歴史を概観した研究(片瀬, 2019)など多岐にわたる。

このテキスト・マイニングのために、社会学者が開発したツールにフリー・ソフトの

⁹ 配属先は、宮城高女：火工部浦戸組 39 名、火工部第五工場製図・事務 4 名、若柳高女：火工部浦戸組 23 名(全員)、登米高女：火工部浦戸組 8 名、火工部山ノ内組 2 名となっている。

KHcorder（樋口，2020）がある。KHcorderでは、まず段階1は自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの全体像を探る段階である。データから形態素（文の最小限の単位としての語）を抽出したのちは、処理の目的に応じて、たとえば語と語の結びつきを探るためには、階層的クラスター分析などがおこなわれる。これに対して、段階2では、データ中からコンセプトを取り出し、分析を深める段階である。ここではコーディング・ルールを作成したのち、分析目的に応じて、たとえばテキストの部分ごとの特徴を探るためには、共起ネットワーク分析などを行うことができる。つまり、このソフトウェアは従来のテキスト・マイニング・ソフトの利点を接合することで①多変量解析によって分析者のもつ理論や問題意識の影響を極力受けない形で、データを要約・提示する、②コーディング・ルールを作成することで、理論仮説の検証や問題意識の追求を行う、といった特徴をもつ（樋口，2020：19）。

4.2. 頻出語と特徴語

表1a～cは3つの高女の「感想文」中に現れた形態素（単語）の多い順（30位まで）に頻度を示したものである。宮城高女は残っている「感想文」が多いので、出現頻度は多くなる。そこで、出現順位に注目して共通する傾向を整理すると、まず当然のことながら、工場や作業に関する語がどの学校でも上位にきている。「工場」「機械」「工廠」「生産」「兵器」「仕事」など、表中の薄い網かけにした部分がそれにあたる。また自分たちを表す「学徒」「生徒」「配属」（表で濃い網かけ）も上位から中位にある。さらに、作業に取り組む気構えを示した語（同じく濃い網かけ）である「一生懸命」「覚悟」「自覚」「精神」が共通している。他方、それぞれの学校に特徴的な語（表中では背景を塗りつぶし、太枠で囲った）を見ていこう。

まず、宮城高女では「国」（18位16件）と「特攻隊」（22位14語）を特徴語にしたが、「国」は登米高女にも27位（4件）現れるので、宮城高女だけの語は「特攻隊」である。これは先に述べたように、若柳・登米高女の「感想文」が書かれたのが1944年の12月末であり、この時点でレイテ沖海戦（10月20日から24日）に「特攻機」が初めて投入されたが、戦果が芳しくなかったため、後述するように、報道が部分的に伏せられた。なお、これについては、戦況や特攻に関する新聞報道も含めて次節で改めて考察する。

次に、若柳高女では、「米・英」「空襲」が特徴的である（登米高女でも「空襲」は頻度5で21位となっている）。これはこの2つの高女の生徒が「感想文」を書いた12月25日の朝に前述した塩釜港空襲があったためであると考えられる。また、登米高女より若柳高女で多いのは、前者が宮城県北部にあるのに対して、後者が同じ北部でも三陸沿岸（したがって塩竈市）により近いところ（現在の栗原市若柳）に所在するために、沿岸部である塩釜空襲が

表 1a 宮城高女の形態素頻度

順位	抽出語	出現回数
1	工場	46
2	機械	36
3	工廠	36
4	仕事	36
5	学徒	31
6	入	31
7	兵器	27
8	心	23
9	海軍	22
10	人	21
11	増産	21
12	自分	19
13	多賀城	19
14	配置	19
15	火	18
16	工	18
17	信管	17
18	国	16
19	期間	15
20	動員	15
21	気持ち	14
22	特攻隊	14
23	組長	12
24	練	12
25	工員	11
26	成	11
27	精神	11
28	一つ	10
29	作業	10
30	良品	10

表 1b 若柳高女の形態素頻度

抽出語	出現回数
火	31
機械	29
工	26
工場	23
心	22
言う	19
配属	18
学徒	17
米	16
空襲	14
英	13
多賀城	13
出来る	12
頑張る	11
期間	11
親切	11
人達	10
生産	10
楽しい	9
工員	9
機銃	8
作る	8
書く	8
身	8
旋盤	8
憎い	8
敵	8
働く	8
動かす	8
兵器	8

表 1c 登米高女の形態素頻度

抽出語	出現回数
機械	26
生産	14
学徒	13
今	11
自分	10
兵器	10
戦場	9
工場	8
仕事	8
心	8
生活	8
入	8
一生懸命	7
覚悟	7
精神	7
配置	7
検査	6
職場	6
前	6
火	5
空襲	5
材料	5
前線	5
以来	4
現場	4
御座	4
国	4
今日	4
事	4
自覚	4

身近に迫った危険と感受されたものと思われる。このことを示す若柳高女の感想文の部分を抜き出すと以下ようになる。まず、彼女らはこの時点で都市部への空襲について新聞を通じてある程度の情報を得ており、覚悟もそれなりにできていたと考えられる。すなわち、

入廠して以来、初めての空襲に遭い、これからの良い実習訓練になりました。工場から帰ってから寮での生活でまず一番楽しいことは、戦局の状況、即ち新聞を見ることです。毎日の様に名古屋空襲、帝都空襲は頻々として記事が見られます度に、多賀城海軍工廠にもきっと来る覚悟はしていました。

しかし、実際に空襲にあうとその衝撃は大きく、また離れて暮らす家族への心配も大きくなっている。

空襲！！生まれて初めて遭った。そう言う時は沈着^{ママ}にして容易に事に驚かぬ様にできなかったのが残念に思い、常に家の事が思い出されてならなかったが、今朝の空襲。そして話に聞く塩釜の惨めさ。あの爆音が敵の飛行機かと思うと、石を投げてやりたかった。

その一方で、この空襲を契機にさらに英米に対する敵愾心を燃やし、兵器増産に励む決意を固めるのであった。またその背景には、プロパガンダ映画による鼓舞もあったことがうかがえる。

今は戦場が間近くなって来ているので、いついつなん時空襲に遭うかわからないので、毎晩毎朝の様に空襲に気をつけていた。それが今朝のように空襲に遭っても、いつもなら慌てるのだが、今朝は少しも慌てず退避した。生まれて初めて観る敵の飛行機、米英を本当にたたきのめさなければならない。一回の空襲で悲鳴をあげていたのでは米英をやっつける事が出来ない。

あの憎い憎い敵の空襲を受け、一層痛切に感じた。それは早く早く兵器を生産してどんどん送り・・・

こんなことではだめだという決意が湧いてまいりました。昨夜の映画といい、今朝の空襲といい、本当に痛切に感じました。自分等の現在居る工場はどうであろうかと自分達の行いはあれで良いだろうかと、本当にくやしくてなりませんでした。

4.3. 「感想文」の全体像と各高女の位置づけ：対応分析

以上を踏まえて、対応分析（Clausen, 1998=2015）によって、3つの高女の「感想文」の全体像を描きたし、各高女の位置づけを確認しておこう¹⁰。図3は、「感想文」の全体に現れた形態素を用いて対応分析を行い、3つの高女の位置づけを示したものである。対応分析では、原点近くに共通してみられる特徴のない語句が集まる（Clausen, 1998=2015）。この場合は、自分たちをあらわす「学徒」「自分」、また工廠での作業にかかわる「機械」「作業」「兵器」がこれにあたる。また第一成分の負の位置（左端）には「特攻隊」が位置しているが、これは先にもみたように宮城高女のみに見える特徴語で、宮城学院の位置づけも第一成分の

¹⁰ なお、この分析ではKHcorderの機能を用いて、次の語句を強制抽出している。すなわち、「火工部」「機銃部」「兵器増産」「入廠」「練成期間」「米英撃滅」「鬼畜米英」である。

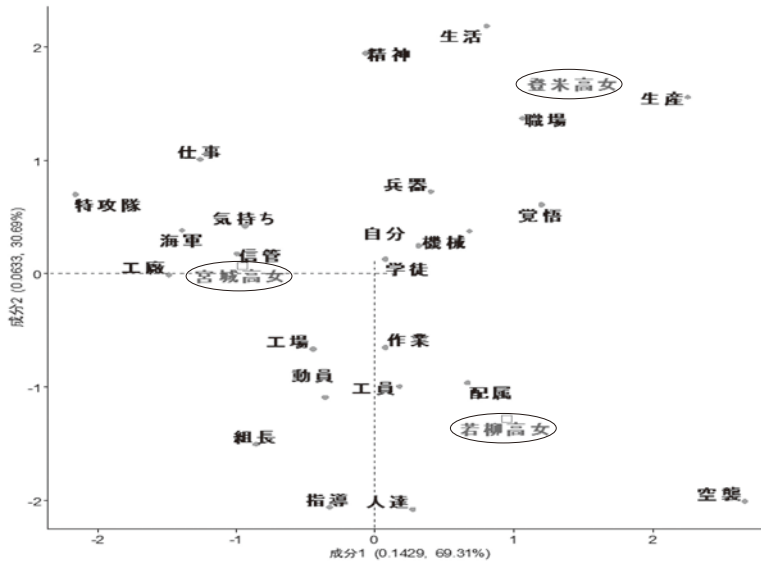


図3 「感想文」の全体像と各高女の位置づけ：対応分析の結果

負の位置にある。

また、若柳高女で特徴的だった「空襲」は第一成分で正の値、第二成分で負の値をとり（つまり右下の第4象限に位置する）、若柳高女もこの第4象限に位置している。また若柳高女のそばには「配属」「工員」、少し離れるが「組長（軍属の浦戸組長）」「指導」が位置しており、配属された職場における工場や組長による指導に関する言及が特徴になっていることも確認できる。これに対して、第一象限には登米高女が位置しており、ここには「生産」「職場」など、兵器製造の現場に関する語句が特徴的となっている。

5. 「感想文」に見る特攻の表象

5.1. レイテ沖海戦とその報道

先に「特攻隊」という語が宮城高女のみにも現れ、若柳高女・登米高女に現れない理由として、宮城高女の「感想文」のみが沖縄戦が始まった1945年4月以降に書かれていたからだと推測した。しかし、「特別攻撃」はその前年の10月20日からのレイテ沖海戦で初めて行われている（正確には21日から）。これに対して、若柳・登米高女の「感想文」が書かれたのは、12月25日であるから、ここに「特攻隊」への言及が現れても不思議でもない。それが現れていないのはなぜだろうか。それは、レイテ沖海戦は日本の連合艦隊が最大限の艦船を投入し、特攻隊を編成して初出撃させたのもかわらず、少なくとも軍令部が作戦目標とし

たアメリカ軍のフィリピン上陸¹¹を阻止できなかったために、その報道も「大本営発表」で誇張されたにせよ、部分的な報道しかできなかったことによるものと考えられる。

すなわち、レイテ沖海戦は、1944（昭和19）年6月のマリアナ沖海戦や10月の台湾沖航空戦で、空母機動部隊と航空隊に大打撃を受け、多くの航空戦力を喪失した日本軍が、アメリカ軍のフィリピン進攻を阻止しようとして、フィリピン・レイテ湾に集結していたアメリカ輸送船団を攻撃しようとしたものであった。日米合計で280隻もの艦船参戦した「史上最大の海戦」と呼ばれるが、作戦半ばでアメリカ艦隊の位置に関する誤情報によって、日本の主力艦隊が撤退してしまったために、作戦の目標を達成できなかった。このレイテ沖海戦の直前1944年10月に第一航空艦隊司令長官に大西瀧治郎中将が着任し、冒頭に述べたように軍令部の指令により20日に4隊からなる「特攻隊」を編成、21日には神風特別攻撃隊が初出撃した。軍令部の指令があったにせよ、必ずしも「特攻」作戦に積極的でなかったとされる大西が「特攻隊」を編成したのは、その直前の台湾沖航空戦により、稼動機が零戦30機程度にまで激減した航空戦力で海軍のレイテ湾突入を援護しなければならなかったための苦肉の策と言われている（神立、2011）。

しかし、この初出撃では天候不良などで敵艦を発見できず、以後24日まで3回出撃しているがどれもが帰還している。他方、24日の海戦では、数波にのぼるアメリカ軍の空爆により、主力戦艦の武蔵が沈没、25日には最後に残った空母2隻のうち瑞鶴は沈没、また瑞鳳も魚雷・爆弾、至近弾多数を受け、航行不能となる。そのため「神風特攻機」がたとえ出撃しても、味方戦艦の掩護射撃、空母から飛び立つ戦闘機の護衛も付けず、いわば丸腰で敵艦隊への体あたりに向かうことになっていた。こうした状況で、なぜ「特攻戦術」を「統率の外道」と呼んでいた大西が、この無謀な戦術を続行したのか詳細は不明とされる¹²。なお、25日には、通算4度目の出撃が行われ、ようやく初めてアメリカ空母部隊への突入に成功し、

¹¹ 連合国軍最高司令官だったD. マッカーサーは、かつてアメリカの植民地フィリピンが任地（マニラ軍司令長官）であった。彼からするとアジア・太平洋戦争初期に日本軍に追われてフィリピンを脱出した後の演説での言葉、“I shall return”にあるように、フィリピン上陸はフィリピン「奪回」であった。この時期は、日本本土への攻撃を控えた時期であり、アメリカ海軍の作戦部などは、沖縄奪取を最優先し、日本と南方の補給線の寸断のためにはフィリピン上陸は不必要としていたが、マッカーサーは「フィリピン国民との約束」を盾にフィリピン上陸作戦に固執したとされる（袖井、2004）。

¹² 戦術としてみても、このレイテ沖海戦の例からもわかるように、広大な西太平洋上で目視によって敵艦隊を探す特攻作戦は、天候に左右されやすく、きわめて不確実な攻撃方法であり、また残り少ない航空機燃料も消耗するという点でコスト・パフォーマンスも悪い戦術である。特攻機を見送った大西第一航空隊長官は、参謀の猪口力平大佐や副官の門司親徳大尉に「こんなことをしなければならぬのは、日本の（軍令部の）作戦指導がいかにまずいか表している。統帥の外道だ」と漏らしていた、といわれる（半藤、2022）。ここには、「一撃講和論」のもと性急に戦果を挙げようとする中央の海軍軍令部と、前線を預かった連合艦隊司令官のあいだに、大きな認識の隔たりがあったと言わざるをえない。しかし、大西は戦争終結の翌日、自決したために、戦後の証言が得られなかった。遺書にも作戦立案者としての責任とともに、戦死した特攻隊員への詫げと感謝（「特攻隊の英霊に曰（もう）す／善く戦ひたり深謝す」）が記されていたが、作戦立案に至る経緯の詳細については触れられていなかった、という（神立、2011、半藤、2022）。

10機の特攻機の体当たりで、空母1隻を撃沈し、5隻に損傷を与えた。これにより神風特別攻撃は翌1945年4月からの沖縄戦で「大和魂」といった精神論のみに頼って、強行されていくことになる（防衛庁防衛研究所戦史室，1972，神立，2011）。

いずれにせよ、この海戦では、連合艦隊は多くの艦船を投入したにもかかわらず、艦隊内の連絡ミスまたは誤情報によって主力艦隊がレイテ湾沖で撤退してしまった（当時、「謎の反転」と言われた）ために、湾内に停泊中のアメリカ輸送船団を撃破してアメリカ軍のフィリピン上陸を阻止するという作戦目標は達成できなかった。また初めて出撃した特攻隊も天候不良によりアメリカ艦隊を捕捉できたのは、第4波の攻撃だけだった（防衛庁防衛研究所戦史室，1972）。この第4波の攻撃についてのみ、たとえば「朝日新聞」は10月29日一面で「神鷲の忠烈 萬世に燦たり」という見出しで伝えているにすぎない。

5.2. 沖縄戦とその報道

特攻作戦が本格的に行われたのは、レイテ沖海戦の約半年後の沖縄戦であった。アメリカ軍がまず戦艦からの艦砲射撃で日本軍地上基地を無力化してから、海兵隊を中心に上陸してくることは、硫黄島戦などで経験済であったので、この上陸を阻止するためには、まずアメリカ艦隊に打撃を与える必要があった。しかし、零戦をはじめとする航空戦力の多くを失っていた日本軍は、またしても精神力を頼みに、無謀で不確実な「統帥の外道」であった「特攻」に頼るしかなかった。

沖縄における特攻作戦は「菊水作戦」として知られる。この作戦名は、南北朝時代の「忠臣」楠木正成の旗印に由来する。当時、沖縄の特攻隊員の間では、死に向かう自分を鼓舞するものとして「七生報国」という言葉が盛んに語られたという（一ノ瀬，2020）。この言葉は、楠木正成が、湊川の合戦（1336年＝北朝暦・延元元年／南朝暦・建武3年）で九州から東上してきた足利尊氏の大軍に敗走し、自刃した時に誓った言葉「七生報国」（「ここで死んでも、七度、生まれ変わり、朝敵を誅して国（南朝天皇家）に報いる」）に倣っている。ここでも「神風」と同じく、過去の歴史上の「伝説」が神話化され、新しい「シンボル」として蘇らせている。これは戦時下では「忠君愛国」「滅私奉公」とともに修身教育に採り入れられ、特に「七生報国」は武運長久にあやかってスローガンとしても多用された、という。この「菊水作戦」に関しては、陸軍は1945年4月6日の菊水一号作戦から6月22日の菊水十号作戦まで行い、海軍からもレイテ沖海戦で特攻を経験した大西指令長官率いる第一航空艦隊が参加した。

まず「菊水一号作戦」・「第一次航空総攻撃」（4月6日－11日）では、4月6日正午、海軍の作戦機は391機、陸軍は133機が特攻に参加し、九州と台湾の航空基地を飛び立った。

このうち特攻機は海軍 215 機、陸軍 82 機が特攻機で、あとはその掩護機であった。ただ、レイテ沖海戦の時と比べて、特攻機には故障などで途中で引き返す機が増えていた。それでも、特攻機がアメリカ艦隊へ突入し（ただしそのうち何機が「体当たり」に成功し、何機がアメリカ艦隊に撃ち落されたかは不明）、特攻機の未帰還機は海軍 162 機、陸軍 50 機に及び、341 名が特攻により戦死した、と考えられる（近現代史編纂会, 2013）。日本軍は続けてアメリカ軍へ打撃を与えるべく 9 日に「菊水二号作戦」と「第二次航空総攻撃」を発令したが、天候悪化により決行は先延ばしとなっていた。12 日、作戦の決行が下令され、海軍の作戦機 354 機、陸軍の作戦機 124 機、うち特攻機として海軍 103 機、陸軍 72 機が出撃した。ここで注目すべきは、12 日の出撃には「桜花」8 機が参加していたことである¹³。「桜花」は、日本海軍が開発した特殊滑空機すなわちそれ自体エンジンを持たず、機首部に大型の徹甲爆弾を搭載し母機につるされて戦闘員の操縦のみによってアメリカ艦艇に突入するグライダーのようなものである。操縦性が低く、航続距離が短いため、母機を目標に接近させなくてはならないため犠牲が大きく、かつ不確実性の高い攻撃しかできない。そのため、アメリカ艦隊を捕捉できず、「桜花」のみその操縦士とも空中投棄して帰投する母機も多かった。この頃、アメリカ軍は「桜花」にコードネーム “BAKA” を付け、嘲っていたと言われる（神立, 2011）。

ところが、1945 年 5 月 28 日に大本営はようやく「桜花」の機密扱いを解除し、部隊の存在を公表した。翌 29 日の紙面で新聞各紙は一面でその「壮烈なる戦意と一発轟沈の恐るべき威力とを以て敵陣営を震撼せしめたる神雷特別攻撃隊員の殊勲を認め、連合艦隊司令長官は之を夫々全軍に布告せり」との海軍省公表を中心に、大々的に報じた。また、朝日新聞（1945 年 5 月 29 日）には「ロケット弾に乗って敵艦船群へ體當り」、「翼下から飛び出す皇軍獨特の新兵器」といった見出しが並んだ。そして、これまでの桜花作戦による戦死者 321 名を布告したもの、戦果については曖昧な記述になっている。沖縄戦では、組織だった戦闘は 6 月 23 日に終わったが、終盤の 6 月に入っても各紙で連日のように報道があった。見出しだけ拾うと、「最後の王手特攻／引返すな俺も續くぞ」（『朝日』（大阪）1 日）、「航空決戦日本に有利」（『読売報知』1 日）とその戦果に期待させ、「全軍目撃す 敵艦の壊滅／感激する勇士に應へよ更に一機で」（『毎日（大阪）』1 日）と航空機のさらなる増産が呼びかけられていた。桜花の記事は数日間に渡り紙面を飾り、6 月 1 日の朝日新聞の「霹靂の如き一瞬敵艦ただ死のみ」という見出しの記事には、当時海軍の報道班員だった作家・川端康成がこの作戦を賞賛する談話を載せている。また NHK も 6 月 13 日より数日間に渡って、桜花部隊

¹³ 先に述べたように、この「桜花」を横須賀の海軍航空工廠で製造していたのも、宮城高女をはじめとする東北地方の高女から勤労働員された生徒たちであった。これについては、本稿末尾の【付論：女学生たちの「桜花」】を参照。

の隊員らの様子を伝えるラジオ放送を全国に流したが、その際に報道班員だった作家・山岡荘八が司会や解説をしていた。

同様に宮城県の地方紙である「河北新報」でも、沖縄戦での特攻作戦は4月に入って頻繁に報道されるようになった。すなわち、

- 4月18日「水上特攻隊」「遺走の艦船群に」「國民特攻隊」
- 20日「特攻の翼増産へ」
- 30日「特攻機、戦艦等轟沈」
- 5月1日「18,000余りを殺傷」「特攻隊相踵ぐ」
- 2日「上聞に輝く感状」「全員特別攻撃隊」
- 3日「上聞に達す」「出撃の盃を交す特攻隊勇士」「最後の勝利我に」
- 5日「五尺の體、弾に代へ」「大空に憧れた」
- 9日「飛機を頼むぞ」
- 11日「特攻隊遺族援護」
- 12日「神機はいまだ」「神兵を語る1」
- 13日「神兵を語る2」
- 14日「押出せ特攻隊」
- 15日「神風特攻隊」

とくに5月の上旬・中旬はほぼ連日のように報道がなされている。時期からして「菊水二号作戦」と「第二次航空総攻撃」に関する報道と思われる。

また、4月20日には「特攻の翼増産へ／今一押の驀進／生産戦士の敢闘期待」という見出しで、産業報国会長・鈴木貞一中将の談話が載っている（図4）。「我が奇襲によりさすが物量を持つ敵陣にも苦戦の色が現れて来た」ではじまる談話は、前線への「補給」の重要性を説き、そのための「生産人の敢闘」を呼びかけている。そして、「特攻隊勇士」をはじめとする「皇軍將士」が戦いの実を上げるには「産業人諸氏の敢闘」にかかっているとしたうえで、「忠勇なる將兵が血風を巻き上げて奮迅する沖縄の空を仰いで我ら産業人は必ず勝機把握の礎となることをここに固く誓うものである」と結んでいる。

先の「感想文」にもあったように、勤労働員されていた女学生たちは動員先で新聞を読んでおり、戦局にも関心をもっていた。この一連の報道や談話を読んで何らかの感想をもったはずである。次に「特攻」への言及が現れる宮城高女の「感想文」を検討してみよう。



図4 「河北新報」1945（昭和20）年4月20日紙面記事
（東北学院大学図書館所蔵）

5.3. 宮城高女の「感想文」における特攻の表象

次に、「感想文」に戻って、宮城高女の「感想文」における「特攻」の表象を検討してみよう。まず「特攻」または「特攻隊」と結びつきやすい言葉があり、それは「精神」（または「魂」）である¹⁴。すなわち、

その言葉をよくまもり、今後一層奮闘をして、特攻隊精神をもって一生懸命働き、増産に励んで必勝の信念をもち、勝利の日まで、どんな苦しい事も・・・

工廠の規律を守って、立派な学徒として恥じない様に特攻隊の精神を何時までも持続して恩奉公致します・

入廠以来早や一ヶ月余りになりましたが、この先私はただ陸海軍の特攻隊の様な勇まし
くも雄々しい精神を、精神として働くつもりです。

一身・一家をかえりみず、ただ一筋皇国の為、又大東亜の為に命を捧げている特攻隊

¹⁴ このことは、結果は省略するが、形態素間のユークリッド距離をもちいて Ward 法で行ったクラスター分析でも確認されている。

員に負けぬ様、我々産業戦士も又特攻魂でもって兵器増産に邁進しようと・・・

「特攻精神」という語は、戦勝終結の翌日にその責任を取って自決した大西瀧治郎・第一航空部隊長の遺書でも使われていた（「平時に処しなおよく特攻精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類の平和のため最善をつくせよ」）。この語は前線でも使われたが、メディア（新聞報道）を通じて国民の人口にも膾炙していたと考えられる。また開戦時の首相であった東條英機は、1944年5月の航空士官学校での演説で「敵機は精神で墜とすのである。したがって機関砲でも墜ちない場合は、体当たり攻撃を敢行してでも撃墜するのである」と、まるで「特攻」の実行を予知するかのように語っていた（陸軍航空士官学校史刊行会編、1990）

次に「特攻」が使われる文脈としては、先の産業報国会長・鈴木貞一中将の談話にもあったように、前線で戦う特攻隊員に一刻も早く兵器を増産して届け、敵である連合軍に打撃を与えてほしい、という文脈がある。

私達をして英米撃滅の為の信管の^{ママ}正品を一つでも多く造り上げ、特攻隊の勇士に報いる奮撃の心をいやが上でも高めました。

沖縄の同胞達の英霊に應える為に、この様に私達の手で作り上げた兵器は神風特攻隊の人々の手に入り、それが憎き英米をやっつける兵器だと言うと自ら元気が盛り上り・・・

米英撃滅の時まで、国家の^{ママ}為の一生懸命働き、七生報国を誓って護国の神となられた特攻隊勇士の方々の御心の万分の一にも報いたいと思います。

もう1つ特徴的な文脈は、戦争における「性役割分業」すなわち前線（特攻隊）の男子、銃後（工廠）の女子という対比の文脈である。

機械になれば、先輩の方々になれて、一日も早くお役に立ちたいと思います。男子は特攻隊となり、南海の空に散り、女子は兵器増産に励進し、国家の求むる所に応じ・・・

今自分がこうやって書いている時でも、沖縄の決戦場では特攻隊、まだ血の気盛りの若い勇士達が敵陣に命を的にして戦っているのである。

今ここで私は誓う。今日よりはきっと真面目に働く。そして特攻隊のますらを達に報いる事を。どうぞ私達を永久的にこの工廠で働かせて下さい。

私達の職場は戦場であり、そして学びの道ではないか。特攻隊に行かれた小隊長は私達に「我に続けと増産の春」の尊い御言葉。今ここに特攻隊の姿をありのまま、目の当たりに。自ら頭がさがる。

こうして、戦時下においては、従来の性別役割分業が、前線と銃後の守りという形で再編成され、「特攻」に関する女学生の表象も、この再編された性役割分業体制の中に位置づけられることになったのである。

5.3. 戦時下における性別役割の再編

近代日本における性別役割分業は、家父長制と資本制の歴史的妥協の産物であること、すなわち明治期の2つの対外戦争による重化学工業の資本主義的發展が、それまでの家父長制と結託することによって成立したことは、つとに指摘されてきた（上野，1990）。本稿では、明治後期から昭和前期に成立した日本の近代家族における性役割分業が、戦時下すなわちアジア・太平洋戦争時には、前線の兵士（特攻隊）と銃後の女学生（勤労働員）という新たな形で再編成されることが明らかにした。これはけっして新しい知見ではない。戦前期の日本で支配的であった「家族国家観」（牟田，1996）からすると当然の帰結であった。

さらにまた、本稿とは異なる視角からではあるが、武田（2019）は、第一次世界大戦下のイギリスの軍需工場における女性労働の綿密な踏査によって、本格的な機械兵器（戦車など）の投入による広範な前線展開をもたらした第一次世界大戦において、銃後の軍需産業に女性が動員されたことの帰結について明らかにしている。それによると、イギリスでは、大戦中の1915年に軍需省が開設され、D. ロイド・ジョージが初代大臣となった。彼は、「国民保険法」の制定（1911年）を主導した政治家であった。また新しく編成された軍需省のスタッフも、国民保険法の制度設計に関与した官僚群が中心となった。軍需省は、「銃後」において機械兵器を効率的な生産する体制を構築するために、それまで工場で働くことのなかった女性など未熟練労働者を大量に投入する必要に迫られていた。そのためには、生産効率の大幅な低下をもたらす「産業疲労」を予防することが重要視された。その結果、労働時間の短縮によって軍需品の効率的生産が追求されることになった。1916年には、軍需省内に福祉部が創設され、女性を中心とした産業戦士の工場内福祉の向上が図られた。軍需省も女性労働者の技能訓練の拡大を推し進め、各種教育機関と連携して全国的規模で職業技能の訓練プ

プログラムの受講を支援した。これは、結果的に女性の労働市場への参入を拡大しただけでなく、熟練化による職業移動を可能にした。いわば第一次世界大戦という戦時におけるイギリスの軍需工業が、女性労働を取り込むことによって、労働時間の短縮や労働環境の近代化という工場内福祉制度を拡充させたという「意図せざる結果」をもたらしたことを意味する。つまり、この時期のイギリス軍需省が目指した「福祉」は、それまでの「工場法」で定められていた最低限の労働条件を越えた「人間的要因」に基礎を置く高水準の労働環境の実現であった（武田，2019）。

他方、アジア・太平洋戦争下での日本では、たしかに女学生という未熟練の若年労働力を勤労動員という形で軍需産業に取り込んだものの、その熟練化を計らず、戦時下の臨時雇用にとどめ、女性労働の活用という点では限定的・一時的にとどまった。大多数の既婚女性はあいかわらず家庭にとどまって、将来の戦士および産業戦士を「産む・育てる性」として国策に協力する形となった（片瀬，2024）。戦後も1960年代の高度経済成長期に高学歴化によってブルーカラー職など低賃金・非熟練職の労働力不足が慢性化したときに、既婚女性は生産部門のパートタイム労働力として活用されるようになった。しかし、これも家計補助的な非正規雇用であり、「男性稼ぎ手モデル」による労働—企業内福祉のレジュームは今もって解体されていない（大沢，2010）¹⁵。戦後日本では、「社会進出」してきた女性たちを熟練した正規労働者として訓練する機会を欠いたまま、彼女らをそれほど熟練を要しない非正規労働者として雇用する方向に向かった。こうして日本の性役割分業は、戦時体制下を挟んで一貫して女性を資本制的産業社会の従属的立場におく体制を維持し続けたことになる。

むすびにかえて：特攻隊員の「恋文」

本稿では、前線の特攻隊の男子と銃後の工廠の女学生という対比で戦時下の「性別役割分業」に注目したが、両者の間に淡い「恋」があったというエピソードもある。一ノ瀬（2020）が紹介しているように、特攻隊員はしばしば死ぬための「精神修養」として寺院などに茶道を習いに行くことがあり、その折に女学生との交流が生まれることもあったという。また特攻隊員が特攻機の操縦桿に女性（学生や地元婦人会など）から贈られたマスコット人形をいくつも括りつけて飛び立つ写真も紹介されている。

さらに相手は女学生ではなかったが、戦死した特攻隊員が残した「恋文」として有名なもの

¹⁵ これ以降、女性のパートタイム労働は増加していったが、それを支えたのは ① 人員調整が容易な労働力を必要とした企業、② 家事育児に支障がない範囲で家計補助をしたい女性、③ 家事に煩わされずに仕事に専念したい既婚男性という三者の「男性稼ぎ手モデル」を前提とした利害の一致があった（上野1990）。

は、次の一文だろう。

きょうこちゃん さようなら 僕はきみが好きだった。
しかし そのとき すでにきみはこんやくの人であった。わたしはくるしんだ。
そして きみのこうフクをかんがえたとき あいのことばをささやくことを ダンネン
した。
しかし わたしはいつも きみをあいしている

これは、1945（昭和 20）年 5 月 11 日、陸軍特別攻撃隊員として沖縄嘉手納湾の米機動部隊に突入し、戦死した上原良司が、幼馴染の石川治子にひそかに残した「恋文」である。ただし、この時点で治子は既婚者であった。この遺書の 2 年前の上原の日記には、

[昭和] 十八年八月十日 悲しき日、勤労奉仕より帰りて久しぶりに馬橋 [千葉県松戸市で、ここには上原が所属した陸軍師団があった] へ伺う。今日には行かなければよかった。否、行っても聞かなければよかった。彼女の婚約の相手が、きまったことを。(中略)
私はあなたを愛していると、何度告げようと思ったことか。しかし、それは私の良心が許さなかった。告げることは易しい。しかし、彼女にその後来るべきこと [= 自身の戦死] によって不幸にしてしまうのでは私が彼女達を愛しているという理由は何処に行ってしまうのか。

今後も私は心密かに、彼女の幸多からんことを祈ろう。不幸なるもの、それは汝なり。

[] 内引用者

彼の思いを知らない治子は、すすめられるままに、父の部下の陸軍大尉と結婚していたのである。しかも、その翌年（昭和 19 年）6 月、上原は思いがけない知らせを受ける。それは、治子が結核で死んだんだという知らせだった。上原の特攻出撃は、治子の死から約 1 年後だった。

彼の愛読書は、イタリアでファシズムを批判した哲学者 B. クローチェの著作だった。遺品となったクローチェの著作の見返しに「所感」と題した遺書が書き込まれ、ページをめくっていくと、本文の随所に文字を丸印で囲んだ箇所がある。それをたどると、上の「恋文」になるのだった（中島 2005）。上原は 1923 年に長野県で生まれ、旧制松本中学（現・松本深志高校）から慶応義塾大学に進学し、学徒出陣で特攻隊員となった。慶応大学在学中に小泉信三の薫陶を受けた上原は、特別攻撃の前夜に書き記した最後の遺言「所感」には「あすハ

自由主義者が一人この世から去って行きます」と書いた（都倉，2019）¹⁶。

付論：女学生たちの「桜花」

戦時体制に対するキリスト教主義学校の対応については綿密な研究（奥田，2002，樽松，2017）があるが、主として男子校（立教学院，関東学院など）に焦点を当て、寄付行為をはじめ学校経営に関する分析が中心になってる。これに対して、本稿では、女子のキリスト教主義学校である宮城高女校（宮城学院）の当時の生徒が海軍工廠へ学徒勤労働員されたときの「感想文」を中心に、戦争とくに「特攻隊」の表象の検討してきた。これによって戦前期日本の「良妻賢母」教育が、伝統的な家父長制と台頭する資本主義の性別役割分業を成立させ、それが戦時下では前線、銃後という分業として対外戦争の「七生報国」の「特攻精神」を下支えしたことを指摘した。本稿ではこの「特攻精神」にもとづく「銃後の守り」としての「多賀城海軍工廠」での「感想文」をもとに、宮城高女の女学生の「特攻」の表象を見てきた。

ただし、女子の軍需工場への勤労働員は、1943年以降は①女子挺身隊（14～25歳の農業従事者をのぞく未婚女性の動員）、②学校挺身隊（女学校卒業時における動員）、③学徒勤労働員（女学校在校生の動員）の3つに分けられる（大平2004）が、今回扱ったのは③である。宮城高女の場合、③も戦局が逼迫するにつれ、2つの段階に分けて行われた。すなわち、1944（昭和19）年5月に「東北風（扶桑）202号工場」（長町の「日本電気株式会社」の戦時名）との間に「学校工場化契約」が成立し、「専攻科」生が勤労働員で同工場に赴き、電波探知機部品製造技術を習得することになった。次に1944年10月に「学徒勤労令」による「通年動員」が指令される。11月3日には4、5年生合計170名が横須賀の海軍航空工廠に向かった¹⁷。さらに、翌1945年4月21日、宮城高女4年生が多賀城工廠に入所する。しかし、その後、2週間ほどの錬成期間（海軍式集団生活の訓練）をへて火工部と機銃部に配属されるが、機材がないため火薬などに関する講義か石運びばかりで意気が空回りし、失

¹⁶ ただし都倉（2019）は、残された上原の手稿の史料批判を通じて、上原が「語弊を恐れずに言えば、絵になる特攻隊員」としてメディアの中で構築されたことを指摘する。それによれば、実際の上原には二面性が存在し、それは「時局に痛烈な批判を向ける理性的側面」と、「特攻出撃命令には抗さず（表面的であっても）「満足で一杯」と記し」た軍国主義者の側面であるという。上原には3種の「遺書」があり、書かれた順に言うと、第1の遺書は『聞け わだつみの声』の冒頭におかれ、第2の遺書も同署に収められている。ここで触れているのは、出撃前夜に書かれたとされる第3の「遺書」である。

¹⁷ 宮城女学校（宮城学院）は、1943年に学則から「基督教の精神」を削除し、校内での礼拝およびキリスト教教育を停止し、文部省から各種学校・宮城女学校（5年制）から宮城高等女学校（4年制）として改編する認可を得た。ただし、1945年時点ではまだ宮城女学校時代の5年生が在学していた。

望している。これが本稿で分析した「感想文」に描かれた「多賀城海軍工廠」の1945年5月の様子である。

これに対して、前年の11月に横須賀航空海軍工廠に動員された4、5年生170名は、この時期、異なる状況にあった。まず第一に、この時期（1944年11月から45年5月ごろ）、横須賀を中心とした京浜工業地帯には、宮城県からは、宮城高女のほか、宮城第一高女、常盤木高女、尚絅高女などから合計3,000名ほどが動員されている。他の東北各県および北海道を合わせると京浜の海軍工廠に動員された生徒数は合計20,000名ほど（神奈川の学徒勤労動員を記録する会、1999）で、動員の規模がまず多賀城とはまったく違っていた。第二に、多賀城工廠で製作されていたのは火薬・信管といった爆弾のパーツであったが、京浜地区の工廠では特攻機本体が製作されていた（だから工場も海軍航空機本部の「航空工廠」であり、大量動員があった）。そのなかでも、宮城高女の生徒に割りあてられたのは特攻機「桜花」の製作であった。「桜花」は自前のエンジンをもたず、機首部に大型の爆弾を搭載した小型の航空特攻兵器で、母機に吊るされて目標付近で分離し発射された。その後は搭乗員が誘導して目標に体当たりさせるというもので、その操縦性の低さから目標に到達する前にアメリカ軍艦艇からの高射砲で撃墜されたものが多かった。最初から体当たりを目標として開発された航空機というのは、世界の戦史の中でもこの「桜花」が最初で最後だったと言われる。なお「桜花」の断面図は、逗子工場に動員されていた宮城第一高女（現・宮城第一高校）の動員記録（神谷ほか、2007）にアメリカ軍作成の断面図が掲載されており、接収された機体が現在、スミソニアン博物館別館に展示されている（図5、6）。

この時期に、宮城高女から横須賀海軍航空工廠に動員された同窓生については、宮城学院女子大学の大平聡教授（歴史学）が、2000年（当時、学徒勤労働員経験は70歳代はじめ）にインタビューした記録をテープ起こしし、『宮城学院資料室年報』に13回にわたって掲載

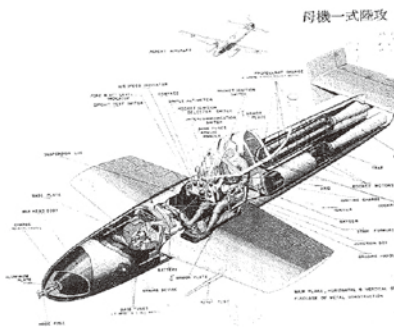


図5 「桜花」断面図（神谷ほか、2007）



図6 「桜花」(半蔵): スミソニアン博物館別館
<https://blog.goo.ne.jp/raffael10/e/af121e130b0ce53b56353167012a1a03>

している。これらのテキストはスキャンして文字識別し、テキストファイルにして、やはり KHcoder (樋口 2020) を用いて分析を行った。その結果の要点を、本稿の分析と対比して示すと以下になる。(1) 多賀城工廠では「特攻」が「精神」と結びついていたが、横須賀工廠では「作業」と結びつきやすい。クラスター分析 (Ward 法, ユークリッド距離) で行ったクラスター分析の結果から、「特攻」と結びつきやすい語は「作業」であった(図 7: デンドログラムから「特攻隊」の含まれるクラスターのみ表示)。

また「特攻隊」を含む文脈としては、

いろいろ説明をしてくださったんですけど、頭には入りませんでしたね。飛行機は特攻隊の方が乗るような、ジェラルミン製の小さなものでした。油まみれにはなりましたけど・・・

そして今度は 6 月に入ると、私は仕上げの仕事じゃなくて、特攻隊のビヨウ打ちをさせられたんです。

仕事はそれぞれ違うことをしていたんですね。私の場合はボルトとナットを特攻隊にはめていたんです。毎日夜遅くまでどこか 3 交替でやっていました。

など実際の作業場面の記述が多い。それも慣れない仕事（最初から体当たりを目標として開発された航空機というのは、世界の歴史の中でもこの「桜花」が最初で最後）に戸惑いながら、深夜まで三交代で機体の増産を急かされていたことがわかる。また「特攻精神」がほとんど現れないのは、このテキストが終戦後 55 年経ってからの回想によるもので、この語自体がほとんど「死語」となっていたと考えられるからである。

なお、この「桜花」について、彼女らは製作手順は教えられていたが、それが「特攻機」

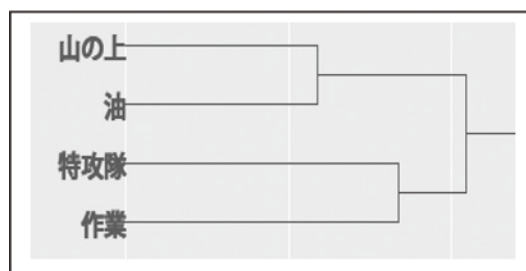


図 7 「特攻隊」をめぐるデンドログラム (部分)

であることは少なくとも当初、明確に認識されていなかった可能性もある。しかし、製作の過程で、機体に帰還に必要な着陸装置が装備されていないことから、通常の航空機でないことには気づいたようである。すなわち、

噂には聞いてたんですけど、着陸装置のない木の飛行機の鉦打ちをやっていたっていう話を聞いたり、そりゃ大変だ、やっぱり大変だ、やっぱりその中に人一人入って人間爆弾になっていくのだね、ということで。それも〔特攻攻撃の実際のことも〕、私が直接見たわけでもないのに、話に聞いて知っているだけのものですから。

桜の花っていう名前をつけられましてね。桜花何号っていう飛行機なんですよ、一人乗りの。着陸装置がないんですよ。そのまま一人乗って敵の軍艦だとか、敵地に人間爆弾なんて突っ込むんですね。だから、それを聞いた時には、本当に、えー、うそーって胸が痛むような気がしまして、一体誰が乗るの、なんてことでひそひそ話をやっておりました。

飛行機は特攻隊の方が乗るような、ジェラルミン製の小さなものでした。・・・

自爆です。自殺行為ですよ。そういうの作らせられて・・・何だか情けなくて、悲しくて、やるせない気持ちだったですね。

横須賀海軍航空工廠で実際に「特攻機」を製作していた女学生の表象は、火薬や信管を作っていた多賀城工廠の女学生の「特攻隊」の表象とは大きく隔絶していた。

(2) これに対して「空襲」は「荷物」と距離が近い（図8参照）。

実際の用法では、

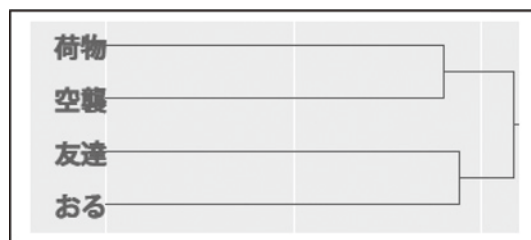


図8 「空襲」をめぐるデンドログラム（部分）

小学校 [= 宿舎となっていた横須賀市浦郷小学校：引用者補足] の横にある坂道を上ると、大きい山の中腹に防空壕がありました。夜、空襲警報がなると同時に、身のまわりの荷物を布団に挟んで担ぎ、避難するだけです。

空襲がひどかったことを思い出します。横須賀の防空壕が完備されていたので、宿舎にも山の上にあったんですが、夜になると、防空頭巾をかぶって山の中に逃げました。

など、実際に夜でも空襲があると荷物を抱えて山中の防空壕に退避した、と回想する用法が多くなっている。多賀城工廠では、都市部の空襲の記事を新聞で読んだり、塩釜空襲の話を聞かされるだけで済んだが、横須賀は東京に夜間空襲に向かう B29 などの爆撃機の通り道なので、実際に空襲警報で荷物を担いで防空壕へ逃げ込むという体験があった。また逗子の海軍工廠では、宮城第一高女の生徒たちが、特攻機に積載する大量の火薬を作製していたので、空襲警報が鳴るたびに作業は中断し、引火・爆発を防ぐため火薬の材料をもって一日に何回も防空壕に退避していた。ただでさえ昼夜兼業で作業をさせられていた生徒の中には、爆薬を抱えたまま防空壕のなかで寝入ってしまったという記述もあった（神谷ほか，2007）。機材や資材がなく作業に入れず火薬に関する座学ばかりで意気が空回りしていた多賀城工廠とは対照的に、横須賀や逗子の工廠は女学生にとって、銃後とはいえ、もう1つの「戦場」であった。

それだけに、戦争終結時の感慨にも複雑なものがあった。

とにかく玉音放送の内容は分かりませんでした。後から先生や舎監の方に戦争が終わって日本が降伏したと聞き、みんなで泣いたんです。今まで頑張ったのに・・・

ただし、戦争は二度と繰り返したくないという戦後50年後の回想には重みがる。

・・・戦争の状態を知らされていませんでしたからね。でもやっぱり大人なって考えれば、とんだ戦争をしてしまったんだなあ、ということ、

戦争はもう二度とやりたくない。本当に。あの時反対する人もいたと思うんですけどね。

【引用文献】

- 秋庭 裕・川端 亮, 2004, 『霊能のリアリティへ——社会学, 真如苑に入る』新曜社.
- 有山輝雄, 2001, 「戦時体制と国民化」『年報日本現代史 7 戦時下の宣伝と文化』現代史料出版: 1-36.
- 防衛庁防衛研修所戦史室編, 1972, 『戦史叢書 海軍捷号作戦 (二) フィリピン沖海戦』朝雲出版社.
- Clausen, Sten Erik, 1998, *Applied Correspondence Analysis: An Introduction*, Sage (=2015, 藤本一男訳・解説『対応分析入門——原理から応用まで——解説 R で検算しながら理解する』オーム社).
- 深谷松男, 2003 「展示概要「戦時下の宮城学院」」『宮城学院資料室年報』9: 87-99.
- 樽松かほるほか, 2017, 『戦時下のキリスト教主義学校』教文社.
- 半藤一利, 2022, 『戦士の遺書—太平洋戦争に散った勇者たちの叫び』文藝春秋.
- 樋口耕一, 2020 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して 第2版』ナカニシヤ出版.
- , 2003, 「コンピュータ・コーディングの実践——漱石『こころ』を用いたチュートリアル」『年報人間科学』24: 193-214.
- Hitler, Adolf, 1925, *Mein Kampf*. Franz Eher Nachfolger GmbH16 (= 2016, 平野一郎・将積茂訳『わが闘争 (上)』KADOKAWA (Kindle 版)).
- 保坂正康, 2019, 『大本営発表という虚構』筑摩書房.
- 一ノ瀬俊也, 2020, 『特攻隊員の現実』講談社.
- 神立尚紀, 2011, 『特攻の真意——大西瀧治郎 和平へのメッセージ』文藝春秋.
- , 2021, 『太平洋戦争秘史——戦士たちの遺言』講談社ビーシー.
- 神谷恵美子・宮城県第一高女 47 回生, 2007, 『海鳴りの響きは遠く——宮城県第一高女学徒勤労動員の記録』草思社.
- 神奈川の学徒勤労動員を記録する会, 1999, 『学徒勤労動員の記録—戦争の中の少年・少女たち』高文研.
- 片瀬一男, 2019, 「集合的記憶の文化社会学——宮城学院創立記念誌『期にいたりて実を結び』の内容分析」『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所』52号: 89-110.
- , 2024, 「少女たちの性的逸脱: その社会の構築の系譜——昭和初期「米沢高等女学校事件」の顛末まで」『東北学院大学データサイエンス研究所論集』創刊号: 19-43.
- 宮城学院資料室, 2000, 「宮城高等女学校の学徒動員記録 1-5」『宮城学院資料室年報』7: 79-120.
- , 2001a, 「宮城高等女学校の学徒動員記録 6-7」『宮城学院資料室年報』8: 75-89.
- , 2001b, 『多賀城海軍工廠勤労動員の記録——動員生徒感想文集 (第1集)』宮城学院.
- , 2002, 「宮城高等女学校の学徒動員記録 8-9」『宮城学院資料室年報』9: 96-120.
- , 2002, 「宮城高等女学校の学徒動員記録 10-11」『宮城学院資料室年報』10: 100-141.
- , 2004, 『多賀城海軍工廠勤労動員の記録——動員生徒感想文集 (第2集)』宮城学院.
- 森岡清美, 1995, 『若き特攻隊員と太平洋戦争—その手記と群像』吉川弘文館.
- Mosse, George, L., 1976, *The Nationalization of the Masses: Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich*. University of Wisconsin Press. (= 1994, 佐藤卓巳・佐藤八寿子訳, 1994, 『大衆の国民化——ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』柏書房).
- 牟田和恵, 1996, 『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』新曜社.
- 中島丈博, 2005, 『あゝ祖国よ恋人よ——きけわだつみのこえ (新版) 上』信濃毎日新聞社.
- 奥在暁子, 2002, 「戦時下のミッションスクール」富坂キリスト教センター『女性キリスト者と戦争』行路社: 61-104.
- 大平聡, 2004, 「動員生徒の感想文について」宮城学院資料室『多賀城海軍工廠勤労動員の記録——動員生徒感想文集 (第2集)』宮城学院.

- 大沢真理, 2010, 『いまこそ考えたい生活保障のしくみ』 岩波書店.
- 陸軍航空士官学校史刊行会, 1990, 『陸軍航空士官学校史』 陸軍航空士官学校史刊行会.
- Said, Edward, 1978, *Orientalism*, Pantheon Books (=1993, 今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社).
- 佐藤卓己, 1994, 「訳者解説・あとがき」 Mosse, George, L., 1976, *The Nationalization of the Masses*. University of Wisconsin Press. (= 1994, 佐藤卓己・佐藤八寿子訳『大衆の国民化—ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』 柏書房): 228-238.
- 袖井林二郎, 2004, 『マッカーサーの二千年』 中央公論新社.
- 鈴木努, 2006, 「二〇〇五年衆議院選挙における三大紙の社説比較——概念ネットワーク分析の適用」『マス・コミュニケーション研究』 69(0): 2-21.
- 武田尚子, 2019, 『戦争と福祉—第一次大戦期のイギリス軍需工場と女性労働』 晃洋書房.
- 都倉武之, 2019, 「「特攻隊員・上原良司」の誕生—ある学徒兵を巡る資料とメディア表象」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』 69: 97-113.
- 上野千鶴子, 1990, 『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』 岩波書店.

【謝辞】 執筆にあたり、すでに公開されている資料とはいえ、『多賀城海軍工廠勤労働員の記録——動員生徒感想文集』ならびに「宮城高等女学校の学徒動員記録」の再分析をご快諾いただいた宮城学院女子大学の大平聡・名誉教授ならびに仲介の労をとってくださった宮城学院資料室の佐藤亜紀さんに感謝申しあげる。またデータ入力および分析の一部は、本学4年生の田山敏旭さんに担当していただいた。また、多賀城・海軍工廠において、軍属として勤務された浦戸栄一氏の足跡をたどる際には、石巻河北社の高配をいただいた。さらに、栄一氏の人となりなどについて、突然の訪問にもかかわらず、夜遅くまで詳しく話して下さった浦戸家の皆様にも記して感謝する。本研究は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究(C)）課題番号 21K 00245 の成果の一切である。